JAPANFOUNDATION

文化遺産保存と考古学の間で
―西アジア・中央アジアの遺跡から―

毎週月曜日 全10回（1月21日～3月31日）
ジャパンファウンデーション国際会議場

●コーディネーターからのメッセージ

西アジア、そしてそれに隣接する中央アジア世界はメソポタミア文明やエジプト文明といった人類最古の文明を生み出したのみならず、地域ごとに特色のある数多くの文化を創造してきました。それだけではなく、ユーラシア大陸の架け橋として洋の東西の文明や文化を伝えるという重要な場でもありました。「絹」に代表されるような「物」のみならず、仏教やキリスト教といった無形の文化そのものも、この地域を経て各地に伝えられてきました。この地域の文明や文化を明らかにすべく、考古学はこれまで大きな役割を果たしてきましたし、今後も同じように新たな発見をもたらしてくれるでしょう。その一方で、近年、文化遺産の保存が大きな課題となって浮かび上がってきています。発掘するだけでなく、それを保存して将来に残していくことが求められています。その意味で、考古学者は調査と保存の狭間に置かれているといえます。この講座を通して、今後、文化遺産の保存と考古学がどのような共存の道を作り上げていけるのか、現場で調査や保存を行っている専門家、そして受講生の皆さんと一緒に考えてみたいと思います。（山内　和也）

第1回 1月21日（月）

総論・バーミヤーン遺跡の保存……山内　和也

ユーラシア大陸の中央部から地中海東岸にかけて位置する西アジア、そして中央アジアの地域では、メソポタミア文明やエジプト文明、インダス文明といった古代文明のみならず、それぞれの地域で様々な文化が生み出されました。そしてまた、こうした文化は、いわゆる「シルクロード」を通じて洋の東西に伝わっていきました。考古学は、このように地中に埋もれ、忘れ去れられた過去を明らかにすることに大きな貢献をしてきました。

しかしながら、近年になって、過去の遺産を未来に伝えるという文化遺産の保存・修復が大きくクローズアップされるようになっています。その意味では、考古学と文化遺産の保存は、それぞれが手を取り合っていく時期に入ってきています。本講座では、アフガニスタンのバーミヤーン遺跡を一つの事例として、その現状を紹介すると共に、今後の方向性について考えていきたいと思います。

第2回 1月28日（月）

ガンダーラ遺跡をめぐる理想と現実：ユネスコ日本信託基金による保存修復事業の経験から……増井　正哉

国の名前の響きがすっかり悪くなったパキスタンですが、その北西辺境州、かつてはガンダーラと呼ばれた地域は中央アジアとインド亜大陸とをむすぶ要地で、クシャン朝を中心に独特の仏教文化が栄え、現在も数多くの仏教遺跡が残っています。ただそれらの保存状態はよくありません。厳しい気候条件が遺跡の保存状態に影響することはいうまでもありませんが、ガンダーラ遺跡における最大の破壊要因は 19 世紀後半から盛んになった盗掘です。仏教寺院を荘厳するガンダーラ仏は、東西の人びとを惹きつけ、盗掘の対象となりました。多くの遺跡では掘り尽くされた状況ですが、政府の力の及ばない部族支配地域では現在も盗掘がつづいています。近年は、盗掘に加えて経済発展にともなう地域開発が大きな影響を与えています。さらに問題なのは保存措置を伴わない発掘調査と観光開発のための整備で、近年大きな問題になってきています。この講義では、ユネスコのガンダーラ遺跡保存プロジェクトの取り組みから、遺跡の保存活用の現状とその問題についてお話しします。

第３回 ２月４日（月）

エジプトの発掘と保存……高宮　いづみ

古代エジプト文明揺籃の地である現在のエジプト･アラブ共和国には、旧石器時代以来の遺跡が多数残されています。前 3000 年頃に始まった古代エジプト王朝時代の遺跡の中には、石造の大型ピラミッドや壮麗な神殿が含まれ、現在も往時の姿をとどめてそびえ立っています。観光立国であるエジプトでは、これらの遺跡やそこから出土した遺物を、大切な文化遺産として保護するとともに、観光用に公開することによって、経済的資源としても役立てています。

ピラミッドのように、当時からほぼそのままの姿で地上に露出していた遺跡の他に、ここ 200 年の考古学的発掘調査によって、エジプト各地で新しく遺跡が発見されてきました。発掘調査によって新に日の下に曝された遺跡は、その後急速に劣化していくため、今日残された遺跡の保護が重要な課題になっています。現在エジプトではどのような遺跡保存の活動が行われているのか、主にメンフィス地区の例を取り上げて、この講座の中でご紹介いたします。

第４回 2月18日（月）

レバノン・ティール遺跡の保存……西山　要一

レバノン共和国の首都ベイルートの南約 80km にあるティール市は、紺碧の地中海に面し温暖な気候に恵まれて中東地域では稀有な緑豊かな土地です。また「フェニキアの中心都市として栄えた港町ティール」として世界遺産に登録されています。フェニキア時代の遺構は未解明ですが、ローマ時代の列柱道路･水道橋･戦車競技場などが修復されています。

世界遺産地区の東約 3km の丘陵裾にローマからビザンチン時代にかけての地下墓や掘込墓が多く営まれています。その一つ TJ04 地下墓は、墓室は大きく破壊されていましたが、壁と天井に色鮮やかな壁画が残され、さらに墓室内の土砂中より多数の壁画片も発見しました。この成果に基づいて、2004 年より石材を墓室の原位置に戻す作業を開始し、2007 年夏にほぼ原形に修復することができました。壁画顔料の化学分析、温湿度･照度･二酸化炭素･大気汚染などの環境調査も行い、将来の TJ04 地下墓の保

存環境管理の研究も進めました。

ティールではレバノン内戦とイスラエルの占領下の 1975 年から 2000 年までの間、遺跡調査は行われず、2000 年に再開されるも 2006 年 7〜8 月のイスラエルのレバノン進攻によって再び中断しました。しかし、現在は戦後復興･社会インフラ整備に伴う発掘調査が盛んに行われています。

TJ04 地下墓の修復、戦時下の文化財保存、レバノンの庶民の生活も合わせ紹介します。

第５回 2月25日（月）

イランの世界遺産遺跡、チョガー・ザンビールとアルゲ・バム……岡田　保良

ユネスコを通じて日本がイランの遺跡保存に積極的に協力している二つの事例を紹介します。

1990 年代のイランは、対イラク戦争終結後の文化復興の時代で、世界遺産でもあったチョガー･ザンビール遺跡の保存修復事業は、日本政府がユネスコに設けている信託基金の対象となりました。20 世紀に入ってフランスの調査団にその存在が明らかにされた遺跡は、紀元前 13 世紀、ジッグラトを中心に計画、造営された古代エラム王国の新しい都が埋もれたものです。保存事業の開始は 1998 年、今ではこの遺跡がイランにおける文化遺産保護の大きな拠点となっています。

上記事業がまだ途上にあった 2003 年 12 月 26 日、イラン南西部は激しい地震に襲われ、ほとんどすべての建築が日乾煉瓦のみで造られた稀有な城郭都市アルゲ･バムの遺跡が壊滅状態に陥りました。震災前、過去の街並みを再生するべく修復の途上にあった遺跡は、「土の建築」を専門とする人たちの間で早くから注目され、訪れる人も年々多くなっていました。震災翌年の 4 月には国際記念物遺跡会議（ICOMOS）の働きかけで国際会議が現地で開かれ、復興方針を方向づける「バム宣言」が採択されました。この年、遺跡は危機遺産として世界遺産に登録されました。

第6回 3月3日（月）

シリア・パルミラ遺跡の調査と保存 ……西藤　清秀

シリアは、人類の歴史という大河の流れの真只中に存在し、メソポタミア、エジプト、ペルシャ、ギリシャ･ローマ地域から様々な文化が流入し、その中で独自の文化を育んできたところです。それは、一部、現在も連綿と人々の中に息づいているものの、多くは地中に静かに眠っています。この地中に眠る人類史の痕跡を世界の人々が注目し、シリア政府の文化省考古博物館関係総局とともに多くの外国隊が発掘調査に従事しています。

シリアでは重要な遺跡の発掘調査の条件に、発掘後の遺構の修復･復元が含まれています。これは、文化財の保全もさることながら、観光が外貨獲得の主産業であるシリアにとって新たな観光資源を生み出す格好の機会でもあります。このような条件の中、我々日本隊もパルミラ遺跡で発掘調査に従事し、その調査成果に合わせて調査箇所の修復･復元をおこなっています。今回、シリアにおける文化遺産の事情を我々の発掘調査･修復･復元作業と合わせながら紹介したいと思います。

第7回 3月10日（月）

イラク古代文化遺産の保存と今後の対策 ……松本　健

2003 年 3 月 20 日にイラク戦争が起こり、サダム政権が崩壊しました。そして新たに民主主義国家が誕生するはずであったイラクは今内乱状態となり、多くの人々が何時死ぬかもしれないという不安の中で毎

日を過ごしています。こうした中、メソポタミア古代文明、イスラム文明が遺した多くの貴重な文化遺産が略奪、盗掘、破壊され、失われ続けています。

これに対し、ユネスコはイラク戦争後、5 月、6 月の 2 度にわたって、専門家をイラクに派遣し、被害状況を調査しました。そしてその文化遺産略奪防止、海外流失防止、保護に向けて各国からの支援を仰ぐと同時に専門家による国際イラク文化遺産保護支援調整会議を立ち上げて、その保護のための対策を協議しています。我が国はユネスコをとおして、イラク国立博物館の保存修復室の修復、遺跡のパトロールに必要な車両の供与、そして文化遺産の保存や保護に必要な研修などの支援を行っています。その取り組みに携わってきた一人としてその成果を報告します。

第８回 3月17日（月）

シナイ半島の遺跡の調査と文化遺産の保存 ……真道　洋子

エジプト文化圏とシリア＝パレスティナ文化圏に挟まれたシナイ半島は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の人々にとっての聖地でもあります。半島の中央部には、モーゼが十戒を授かったシナイ山やユネスコの世界文化遺産に登録されている聖カタリーナ修道院があります。1985 年より川床睦夫博士を隊長とする発掘調査隊がシナイ半島南西部のトゥール・ラーヤ地域の遺跡の発掘調査を行っています。この地域には、港湾都市であったラーヤおよびトゥール、そしてライソウ修道院遺跡の大きな3つの遺跡があります。いずれも聖カタリーナ修道院とも強いつながりがあり、また東西開港交易の重要な拠点としても機能していました。これらの遺跡の重要性が明らかとされつつある中で、遺跡の破壊につながる塩害や風害の問題に対処するとともに、出土遺物や発掘資料を後世に伝えていくため、展示室の開所やデータのデジタル化などを進めています。この講義では、この 20 年以上にわたる発掘調査の成果を紹介すると同時にシナイ半島における文化遺産についてお話します。

第９回 3月24日（月）

タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存 ……岩井　俊平

タジキスタン共和国の南部に所在するアジナ・テパは、7 世紀から 8 世紀に機能していた仏教寺院址です。寺院北側の中央には大型のストゥーパ（仏塔）が残り、その南東から全長 12.8 メートルに及ぶ大涅槃仏が発見されたことで有名です。さらに、周囲の祀堂からは小型の奉献ストゥーパや壁画、そして多くの塑造仏像・菩薩像が出土し、この時期の中央アジアで仏教が篤く信仰されていたことが証明されました。

現在は、世界遺産リストへの登録も視野に入れ、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による遺跡全体の保存事業が進行しており、考古・建築・土木といった様々な分野の研究者が、現地の専門家と協力して作業を行っています。本講義では、このような保存と考古学調査が並行して行われている現場の実態を詳しく紹介するとともに、それに付随して発生する問題点についても考えていきたいと思います。

第10回 3月31日（月）

文化遺産の保護と考古学……前田　耕作

歴史的建造物や記念物を人類共通の文化遺産として護ろうとする運動が生れたのは、第1次世界大戦の後のことでした。それはそれだけ多くの人類の歴史や記憶にかかわる作品が戦争によって失われた

ということでもあります。現在では戦争のほかに、生態系の人為的な破壊による別のかたちでの文化遺産への影響が現れています。文化遺産の保護は、時代の推移に応じてさまざまなかたちで捉えられ、それに応じて採られる対応策もことなり、いよいよ多様化しているといえます。かつては対立的なものとして捉えられていた自然と文化が、今日ではどちらも不分離な関係にあり、ともに保護されるべきものとされ、文化的景観といった新しい保護概念も生み出されています。

さらには、考古学的発掘を破壊の一要因と考える極端な意見も生れてきています。保護と考古学の問題を全体の総括として現場で逢着する問題を通して具体に話したいと考えています。

講師紹介

山内　和也（やまうち　かずや）（講座コーディネーター）

独立行政法人国立文化財機構・東京文化財研究所
文化遺産国際協力センター・地域環境研究室長

1961 年生まれ。早稲田大学で東洋史、考古学を学んだ後、イラン･テヘラン大学に留学し、イランの古代言語･文化を学ぶ。専門はイラン及び中央アジアの文化史で、特に北西イランの山岳地帯における移牧民の空間利用を生態環境考古学的な視点から研究。現在は、アフガニスタン、タジキスタン、イラン、インド、エジプト等、西アジア･中央アジアの各地で考古学調査及び文化遺産の保存修復に携わる。

増井　正哉（ますい　まさや）　奈良女子大学生活環境学部教授

1955 年大阪生まれ。京都大学工学部建築系学科卒業。同大学院工学研究科博士後期課程研究科博士後期課程単位修得退学。専攻は建築史･歴史遺産の保存と活用。1983 年から 1993 年まで、京都大学学術調査隊の隊員としてパキスタンでガンダーラ仏教遺跡の発掘調査に参加。1994 年からユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクトの日本側チームリーダーとしてラニガト遺跡の保存修復作業に携わる。日本国内でも多くの保存修復事業に関わる。著書に『ラニガトーガンダーラ仏教遺跡の総合調査報告書』（共著･京都大学学術出版会、1994）、「ガンダーラ仏教遺跡における仏塔の復元と整備に関する調査研究」『シルクロード学研究　Vol.9』（共著･シルクロード学研究センター、2000）など。

高宮　いづみ（たかみや　いづみ）　近畿大学文芸学部准教授

1958 年茨城県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士課程前期修了、同博士課程後期満期退学、ケンブリッジ大学考古･人類学科 M.Phil.コース修了。早稲田大学助手、早稲田大学非常勤講師、明治大学文学部非常勤講師、近畿大学文芸学部講師を経て現職に。1980 年代から早稲田大学のエジプト調査隊に参加し、現在はアブシール南遺跡（早稲田大学･サイバー大学調査隊）とヒエラコンポリス遺跡（ヒエラコンポリス調査隊）の調査を継続中。主な専門は、エジプトにおける初期国家形成期の研究。主要著書は、『古代エジプトを発掘する』（岩波新書、1999）、『エジプト文明の誕生』（同成社、2003）、『古代エジプト　文明社会の形成』（京都大学学術出版会、2006）。

西山　要一（にしやま　よういち）　奈良大学文学部教授

1949 年大阪府生まれ。龍谷大学文学部国史学科卒。1973～1985 年 3 月財団法人元興寺文化財研究所保存科学研究室研究員、1985 年 4 月より奈良大学文学部文化財学科保存科学教員。1978 年埼玉県･稲荷山古墳出土鉄剣に 115 文字の金象嵌銘文を発見し表出、以来、古代の日本･朝鮮半島･中国の象嵌銘文大刀の研究を行っている。1987 年より奈良の文化財所在地において大気汚染観測を行い、文化財に及ぼす影響と防御の研究を継続している。レバノン･ティールの考古学調査には 2002 年より参加、2004 年からはローマ時代壁画地下墓の修復に着手し、2007 年にほぼ完了した。「レバノン共和国･ティール市郊外ラマリ地区所在地下墓 TJ04 保存修復研究 2004･2005 年度概要報告」(『文化財学報』)、「レバノン共和国所在の壁画地下墓の大気環境」(『ラーフィダーン』)など。

岡田　保良（おかだ　やすよし）　国士舘大学イラク古代文化研究所教授

1949 年生れ。75 年京都大学大学院修士課程修了。京都大学工学部助手を経て、80 年国士舘大学イラク古代文化研究所講師、95 年同教授。京都大学博士（工学）。専門は古代西アジアの都市史及び建築史。著書等に『メソポタミア建築序説――門と扉の建築術』(共編訳、1985)、『東洋建築史図集』（共著、彰国社、1995）、「古代メソポタミアの宗教建築」（小学館『世界美術大全集東洋編』第 16 巻所収、2000）、『イラク文化財保護の地平線』（叢書[文化財保護制度の研究]、東京文化財研究所、2004）、「震災後のアルゲ・バム遺跡――修復への道程」（『西アジア考古学』第6号、2005）など。1995 年からユネスコ・コンサルタントとしてイランのチョガー・ザンビール及びアルゲ・バム遺跡の保存事業に従事。2005 年から国際記念物遺跡会議 ICOMOS 本部執行委員。

西藤　清秀（さいとう　きよひで）　奈良県教育委員会文化財保存課主幹

1953 年生まれ。1983 年アリゾナ大学大学院人類学専攻修士課程修了。1985 年関西大学大学院日本史学専攻博士課程前期修了。1985 年 4 月より奈良県立橿原考古学研究所研究員。2005 年より現職および奈良県立橿原考古学研究所研究員。専門はシリア・パルミラの葬制の研究。1990 年よりパルミラ遺跡における発掘調査に従事。

関連論文には'Excavation at Southeast Necropolis in Palmyra from 1990 to 1995', ARAM Vol.7, ARAM Society, 1997、「パルミラ地下墓に関する二三の考察」『隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究――シルクロード学研究』Vol.5, (シルクロード学研究センター、1998)、「フィールド・ミュージアムとしてのパルミラ遺跡」『沙漠研究』第 14 号 2（日本砂漠学会、2004）、「パルミラの墓に見るランプと死者について」『三笠宮崇仁殿下米寿記念論集』（東方学会、2004）、'New Discovery in Palmyra 2001', *The International Conference on Zenobia & Palmyra 2002,* Al-Baath University, 2005、'Palmyrene Burial Practices from Funerary Goods', Cussini, Eleonora(ed.), *Journey to Palmyra,* Brill 2005、'DIE ARBEITEN DER JAPANISCHEN MISSION IN DER SUDOST-NEKROPOLE', Schmidt-Colinet, Andreas(Hrsg.), *Palmyra,* Philipp von Zabern Mainz, 2005、「パルミラ地下墓の遺体に伴われた羊骨―特に中指骨に関してー」『ラフィダーン』28(国士舘大学、2007)。

編著には *'Tomb F-Tomb of BWLH and BWRP- Southeast Necropolis Palmyra, Syria Publication of Research Center for Silk Roadology Vol.2'*,, Research Center for Silk Roadlogy, 2002、『パルミラにおける葬制とその社会的背景に関わる総合的研究』平成 13 年～16 年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、2005。

松本　健（まつもと　けん）　国士舘大学イラク古代文化研究所教授

1947 年生まれ、福岡出身。国士舘大学文学部史学地理学科卒。以後イラクの各地で発掘調査を実施、さらに、レバノン、サウディアラビア、シリア、そして現在はヨルダンで発掘調査を行っている。専門は西アジア考古学。

真道　洋子（しんどう　ようこ）　イスラーム考古学研究所研究員

1960 年東京都生まれ。早稲田大学文学部人文学科卒。早稲田大学文学研究科考古学専攻博士後期課程単位修得退学。1989 年より中近東文化センター研究員、2007 年より現職と兼任。1981 年よりほぼ毎年早稲田大学、出光美術館、中近東文化センター、イスラーム考古学研究所によるエジプトのフスタート遺跡、トゥール遺跡、ラーヤ遺跡の発掘調査に参加。専門はイスラーム・ガラス文化史。著書として『イス

ラームのガラス』(中近東部文化センター、2002)、『イスラームの美術工芸』(山川出版社、2004)、主要論文として、'Islamic Glass from Raya in the 8th Century in Raya', in: *Archaeological Survey of the Raya/al-Tur Area on the Sinai Peninsula*, Egypt: 2005 and 2006, edited by Mutsuo KAWATOKO, Islamic Archaeology Mission The Middle Eastern Culture Center in Japan and Dar al-Athar al-Islamiyyah National Council for Culture, Arts and Letters, Kuwait: 2007, pp.97-107 など。

岩井　俊平（いわい　しゅんぺい）　龍谷大学龍谷ミュージアム開設準備室嘱託職員

1976 年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程を学修退学後、東京文化財研究所文化遺産国際協力センター特別研究員を経て現職。専門は中央アジア･アフガニスタンの考古学で、特に仏教が中央アジア全体に広がった時代についての研究を行っている。現在は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金で行われているアフガニスタンのバーミヤーン遺跡保存事業や、タジキスタンのアジナ･テパ仏教寺院保存事業に参加している。

前田　耕作（まえだ　こうさく）
アフガニスタン文化研究所所長／東京文化財研究所客員研究員

1933 年生まれ。名古屋大学文学部を卒業後は、教職に就き、長くアジアの有形･無形の文化とその歴史を語ってきた。和光大学名誉教授。1964 年、名古屋大学アフガニスタン学術調査団の一員としてアフガニスタンの仏教遺跡の調査に携わって以来、今日に至るまで中央アジア、西アジア、南アジアの古代遺跡の実地調査に従事してきた。2001 年にバーミヤンの大仏が破壊されてからは、ユネスコ文化遺産保護日本信託基金による遺跡の保存事業に参加し、つねに修復と発掘の現場に関わっている。

著書:『ディアナの森』(せりか書房、1998)
『アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤン』(晶文社、2002)
『アジアの原像』(NHK ブックス、2003)
『宗祖ゾロアスター』(ちくま学芸文庫、2003)

訳書　バシュラール『火の精神分析』(せりか書房、1968)
エリアーデ『宗教の歴史と意味』(せりか書房、1973)